

調査研究報告

都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究

やぐち えつこ
矢口 悦子
なかの ひろえ
中野 洋恵

< キーワード >

子どもの居場所 開かれた学校 父親の地域活動
PTA活動 青年団活動 ネットワーク

< 要 旨 >

都市化の進展に伴う社会変化の中で家庭を取りまく環境も大きく変貌している。家族の規模が小さくなるとともに家族の個別化が進み、子どもが成長していく上で必要な社会的な人間関係を作ることが難しくなっている。こうした問題に対して国立婦人教育会館では子どもの生活圏である地域の教育力の再生を促すことが重要だと考え、「家庭を支える地域の教育力」を基本的なコンセプトとして平成8～9年度にかけて、実際に行われている様々な活動の中から地域の教育力を検証する事例調査研究を実施した。調査研究にあたってはプロジェクト委員会（座長：天野正子お茶の水女子大学教授）を設置し、全国26事例のヒアリング調査を実施した。事例調査の結果、以下の知見が得られた。

- ・それぞれの地域の特性に応じて様々な組織や機関、団体が連携して活動を進めていることが明らかになった。“持てない荷物はみんなで持とう”というネットワーク形成が重要である。しかも活動の中で参加者の主体性が新しい活動を生み出していくというプロセスが見られた。
- ・地域の教育力、家庭、学校、地域の連携は子どもを中心にして議論されることが多い。しかし、子どものためにという目的で計画された子どもの居場所づくりの活動は、同時に大人にとっての居場所をも保障するものである。
- ・異年齢の子どもたち、子どもと青年、子どもと大人をつなぐ活動のきっかけとなったのは、①祭りなどの郷土芸能等の伝統文化、②新たな地域文化の創造、③「夜」と「食」を媒介とした関わり、④体を使いながら共同で「何か」を作り上げる、⑤「いじめ・いじめられ体験」などである。

1 はじめに

都市化、情報化の進展に伴い、家庭を取りまく社会環境は大きく変貌しつつあり、社会の変化や家族の多様化の中で家庭教育の在り方そのものが問われるようになってきた。平成7年4月に中央教育審議会は、文部大臣から「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の諮問を受けた。そして、豊かな人間形成を育むためには今日の受験競争の過激化、いじめや登校拒否、社会体験の不足などにどのように対応したらよいか、また、子どもたちの人間形成に大きな意味を持つ学校・家庭及び地域社会の教育の役割と連携のあり方について検討する

ことが求められた。こうした動きを踏まえ、国立婦人教育会館では「都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究」をテーマとして、家庭と地域の連携はどのようにすれば可能であるのか、具体的な方策について考える調査研究を実施した。家族規模が小さくなり、かつ家族の個別化が進んでいるという現状では、子どもが成長していく上で必要な社会的人間関係を家庭内だけで作っていくことは難しくなっている。子どもの生活圏である地域の教育力の再生を促すことが重要なことだと考えた。そこで「家庭を支える地域の教育力」を基本的な概念として、実際に行われている様々な活動の中から

地域の教育力を検証する事例調査研究を、天野正子お茶の水女子大学教授を座長にプロジェクトチームを作り、平成8年度から2年計画で研究を進めてきた。

平成8年10月から平成9年6月にかけて全国各地で行われている様々な活動に対するヒアリング調査を実施した。調査項目は、1.活動を始めたきっかけ 2.活動・事業のねらい 3.活動内容 4.活動・事業の仕掛人 5.活動の効果 6.地域への波及効果 7.家庭・地域・学校の連携のとらえ方 8.活動メンバーの構成 9.活動資金の集め方 10.活動上の問題点 11.今後の企画 12.自治体等への要望などである。都市化は都市だけの問題ではないという認識から対象地は都市部から農村部に及ぶ全国26事例を調査対象とした。本稿では以上の事例調査を通して、地域の教育力に迫ることにしたい。ここで注目するのは、第1にそれぞれの活動がどのような人、団体、グループによって担われているのかといった組織面、第2は活動を展開している人々を結びつける媒介項である内容面である。この2点から改めて事例を検討することにしたい。なお1から4までは中野が5以降は矢口が執筆した。詳細については報告書を参照されたい。

2 組織面からみた活動事例

報告書に取り上げられている事例を改めて検討し、地域の教育力について組織面から検討していくことにする。ここでは、5つの事例をとりあげる。

(1) 子どもを中心に据えた事例

—福島県伊達郡山木屋地区「田んぼスケートリンク」—

標高550メートルの山間に位置し、寒さの厳しい福島県伊達郡川俣町山木屋地区では冬の間、子どもたちが室内でゲームに明け暮れていることに危惧を感じる住民が多かった。厳しい寒さを利用して何かできないかと考え、田にスケートリンクを作り、子どもたちに滑らせたかどうかという案が出された。そこで町長、地区体育振興会長、町体育協会会長などが、群馬県嬭恋村の視察を行った結果、3,265㎡の水田を借用し、天然スケートリンクが作成されることになった。昭和58年にスケートリンクが開放されてから、小・中校生を対象としたスケート教室が開催され、「川俣スケートクラブ」が発足し、氷上運動会なども開催されるようになった。こうした活動を通して子どもたちのスケートの腕が上昇し、各種の競技会で好成績をおさめるようになった。そうなるに関心も高まり地域の中での協力の輪が広がっていった。スケートリンクの作成と維持、管理は多くの労力を要するため、小・中学校のPTAが協力している。スケートリンクの維持は極寒の深夜の散水と氷をならす作業で毎日人力で行っている。10～15人からなる班が7班あり、毎日作業

が必要であるため、一週間に一回は作業に当たることになる。構成メンバーは30～40歳代の父親と母親で毎年2～3月にかけて、1回につき3～5時間の深夜の作業が行われる。学校では冬の体育の授業をスケートにしてリンクを利用している。ここでは、地域の体育に関わる団体と行政、PTAと学校が連携して活動を進めている。

子どものために何かを作るなど子どもの活動のための舞台設定をすることは、これまで多くの地域で行われてきた。スタート時点で、冬の寒さを利用して田にスケートリンクをつくるといった試みもそのひとつであったと思われる。しかし、この事例の特徴は、スケートリンクを作って子どもたちが滑ったという活動だけに終わっていないところにある。子どもたちのスケートの腕前が上達したことが励みとなって、新たな活動を生み出していったのである。つまり、子どもの成長が契機となり活動が活性化し、子どもの成長を支える父母、そしてそれを背後から支援する団体や行政との連携も進んでいく。真冬の厳しい寒さの夜中にスケートリンクの整備をするというのは、生やさしいことではない。にもかかわらず、父母や地域の人々との協力関係によって可能になっている背景には、子どもが自己成長を遂げ、そして、子どもの成長を地域の共同体が直接的に支えるという関係性が成立しているところにある。子どもを中心に活動が、子どもの成長により活性化する例として注目すべき事例の1つである。

(2) 地域文化の創成として

—新潟県佐渡郡小倉子ども鬼太鼓—

小倉子ども鬼太鼓は、昭和49年、学校の経営方針により新潟県佐渡郡小倉地区の伝統芸能を課外活動として取り上げたのが始まりで、20年以上続けられている。小倉地区は過疎化の中で子ども数が減少し、全校児童数は15人、点在する家庭は孤立化した。山村で自然に恵まれているものの、子どもが自分一人で友だちの家へ遊びに行くことは容易ではなく、外で友だちと遊ぶ機会が少ない。学校から帰っても室内での一人遊びが多くなっている。こうした状況において、学校が子どもの社会性を育む重要な場所となっている。児童の熱演に感動した学校や地域住民の支援、児童の意欲によって活動が継続し、昭和51年に「ふるさと運動」文部省委嘱事業のモデル校となり、学校の課外活動と子ども会の両面から、小倉子ども鬼太鼓が進められた。このときPTA会長でもあり、子ども会育成会長でもあった永田栄嗣氏は、子ども鬼太鼓育成会を作り、その初代会長となった。その後、指導者の育成や渉外の窓口になっている。小倉鬼太鼓活動を支えているのは、学校と子ども鬼太鼓育成会、子どもの保

護者である。生まれも育ちも小倉地域という教師がいないため、技術指導はお手上げである。学校は連絡調整や応援に徹しており、技術指導は指導者や育成会にまかせている。鬼太鼓の演技の回数を重ねるうちに、応援してくれる地域の人も増え、保護者も衣装の着付けや会場送迎を受け持っている。活動も20年をこえると地域の人々の理解が深まり、協力する人が増えてくる。しかし、30～40代の若い保護者層が育成会で指導者として活動しなければ鬼太鼓は消滅の可能性が危惧される。そこで組織の維持と再結集のため平成8年度に規約を成文化し、育成会の事務局を小倉小学校におくこと、会長は小学校のPTA会長を充てること、副会長はPTA副会長、学校長を充てることなどを盛り込んだ規約を完成し、新たな一歩を踏み出した。

地域の伝統文化を継承していく活動は、全国各地に見られるが、子どもは大人が引いたレールにのり、活動の主体とはなっていないことも多いのではないだろうか。地域の伝統文化の受容者であり、その文化の主體的な担い手にはなっていないこともある。小倉地区の子ども鬼太鼓は、子どもを受け手としての存在ではなく、地域文化の創成の主体として位置づけているところに特色がある。都市化が進む一方で、地方では過疎化が進んでいる。小倉地域では、過疎化によって地域の伝統文化を子どもも大人もともに担い手としてやっていかなければ成り立たないという厳しい状況がある。これが、逆に幸いして、子どもをお客さんにすることなく、父親も母親もイヤイヤ手伝うのではなく、大人と一緒に、伝統文化を継承・発展させている姿がみられる。少人数であるため否応なしに協力しなければならぬ状況をプラスにとらえ、保護者が学校職員との信頼関係を築いている。学校という場の中で、擬似的な体験による伝統文化の発表ではなく、子ども自身がコミュニティの形成の主体へと転化しており、地域の固有性を生かした「村おこし」につながる1つの活動事例として注目したい。

(3) 地域に開かれた学校づくり—千葉市立打瀬小学校—

学校は、新しい地域社会の活動拠点として、家庭と地域との結びつける上で大きな役割を果たすことも可能になる。新都心計画の一環として、1995年に開校した新設校、千葉市立打瀬小学校は、その建物からしてこれまでの学校のイメージを打ち破るものであった。建築家、小嶋一浩氏の設計による校舎には、学校を取り囲む塀もなければ校門もない、体育館、コンピューター室、家庭科室などは地域住民が、生涯学習施設としても利用しやすいように、建物の外側に配置され、教室は大きなガラス面で覆われ、外部からよく見えるといった、開放的な構

造になっている。

地域住民との意思疎通を図るために、学校便りを在籍児童がいない家庭も含めて全戸に配布している。これは、学校活動の内容を地域全体に知らせると共に、地域住民の学校行事への参加や協力も要請するという役割を果たしている。この学校便りで「打瀬小の子どもたちのために何かできることはありませんか」と呼びかけ、「地域の先生」による教育活動を実施し、音楽、スポーツ、陶芸等の技術のある人を人材登録して、クラブ活動や生活科の学習等に協力してもらっている。また学習参観は二日間にわたる。学校全体を保護者ばかりでなく、地域住民にも開放し、自由な授業参観を実現した。そのあとで教育を語る会を開催して、地域住民と学校教育について議論するなど、地域住民が交流する場ともなり、新しい街のコミュニティ形成に大きく貢献している。

この活動事例は、学校をどのようにして地域に開いていくかを考える上での1つのモデルとなるケースである。学校主体ではあるが、学校という空間の中で、教師が子どもに教えるという、いわば「閉じた関係」を、学校を地域に開くことにより、閉じた関係性を組み替える試みといえる。新都心である千葉県打瀬地区は、ニュータウンであり、先の福島県や新潟県の事例に見られたようなこれまで続いてきた地域共同体が存在しない。逆に、新たに生活の共同体をどのように形成するか、あるいは住民としての「共同意識」をどのように形成していくかが課題になる。ここでは、小学校という限定された地域の中で、学校が地域住民を巻き込むことによって、新しいコミュニティを創生する試みといえる。学校と地域との関係といえ、これまで校庭開放や施設の開放といったハード面のみが注目されてきたが、ここでは、学校の制度的な枠組みを広げることにより、コミュニティ意識の醸成を可能にしている。

(4) 他の団体とのネットワーク、行政とのネットワーク —東京都世田谷区せたがやチャイルドライン—

世田谷区は、従来から羽根木公園にある遊び場「プレーパーク」をはじめ、ボランティア活動が盛んであった。中央教育審議会の専門委員となった、世田谷ボランティア協会理事長牟田悌三氏の「いじめの問題で何か始められないのか、地域で力をあわせてやれることがあるのではないか」という呼びかけに、種々の市民団体が集まり、「こどもいのちのネットワーク」という組織が形成された。いじめをテーマにしたシンポジウムを3回にわたって開催し、いじめ解決の途を模索してきたが、この中で子ども自身が24時間電話ができるイギリスの「チャイルドライン」を知るところとなった。メンバー5人がイギ

リスに視察に行った結果、「いじめ」「虐待」「不登校」「家族問題」「非行」等様々な問題に対して、電話による相談援助活動が効果的であることを知った。

帰国後、世田谷区にもこのようなシステムを作ろうと、世田谷ボランティア協会が世田谷区の議員やボランティア団体から構成される企画運営委員会を発足させ、24時間電話相談機関の設立を提言としてまとめた。世田谷区教育委員会の委嘱を受け、文部省が市町村教育委員会と民間と共に行う事業について220万を目途として半額まで助成する「地域教育活性化センター活動推進事業」を利用して24時間電話相談「せたがやチャイルドライン」を平成10年3月に実験的に実施した。実施にあたっては、世田谷区で子どもたちの問題に向き合っている相談機関、施設やボランティアグループ、民間の「子どもの虐待防止センター」「子どものオンブズパーソン研究会」といった相談機関、遊び場「世田谷プレーパーク」、青少年自立支援の「憩いの家」、フリースクール「はくんち」、私塾「世田谷教育研究所」などが協力している。子どもたちの持つ具体的な問題解決に向けて、それぞれが持っている情報を提供しあい、討議、協議できるネットワークを持っていることが、電話相談の実施を可能にした背景となっている。

「せたがやチャイルドライン」は、子どもの活動に関わる様々な団体が行政や民間にとらわれず、ヨコのつながりから新しい活動を展開していったケースである。行政と民間の関係は行政が指導的であったり、民間が批判的であったり、とかく“官対民”という対立する構図になりやすい。ところがこのネットワークは、行政も民間も上下関係のないゆるやかなネットワークであり、それゆえにこれまでなかったような新しい発想で次々に新しい活動が展開している。行政と民間の連携を考える上では示唆に富んだ事例である。

(5)参加者主体の地域活動

—横浜市戸塚区すぎのこおやじの会—

1990年前後から都市部を中心に子育てを考え、子育てに参加する父親の動きが活発になってきた。神奈川県横浜市戸塚区にある高層住宅団地ドリームハイツ（約1800世帯）に住む父親たちの会「すぎのこおやじの会」も、その一つである。団地の中の自主保育園の園舎の補修、動物小屋づくり、遊具づくりに駆り出された父親たちが家庭の外での子どもの素顔に接するおもしろさを体験したことをきっかけに会が結成され10年以上続いている。

子どもの卒園、卒業で自然に活動しなくなるおやじの会が多い中でこれほど長く続いていることについて、この事例を研究した天野正子は次のように述べている。

「みんなが一斉に同じ活動をするのではなく、また“みんな公平に役割分担して”もなんとなく息苦しい。ルールもリーダーシップの存在もあいまいなまま自由自在に参加する。……何よりもおやじ一人ひとりが楽しむことに力点が置かれている。……そこには“何々のために”というつきつめた調子とは別の伸びやかな気分がある。」つまり活動の基本が無理せず、自分たちの楽しめることに置かれているのである。こうしたおやじの会の活動を通して「社会的なオジサン」として地域の子どもの関係も作られていく。おやじの会は家庭や学校との連携に関しても慎重である。家庭、地域との連携も下手すれば地域と家庭が協力して子どもを大人の監視下に置く危険性をはらんでいる。「親に告げ口をしない」ことが社会的オジサンたる者の最大の資格要因だという。

しかし、10年以上活動を続けていくの中で生活していく地域が課題となるにつれて、「自分たちだけが楽しむ会」から脱皮を始めている。1995年には横浜、川崎市のグループが集まり、会社人間である男性の目を地域に向けさせることをねらいとして「おやじサミットIN横浜」を開催しネットワークを広げている。さらに子どもの健全育成に関わる様々な組織や活動の担い手とどのような関係を形成していくのか、まちづくりに取り組み始めると社協や行政、他の市民団体との関わりも重要である。かつての共同体での相互監視的な「ベタベタ」型人間関係でなく、都市型社会の血の通わない「バサバサ」型人間関係でもなく、密と粗がバランスよく混じり合ったヨコのつながり「フカフカサラサラ」型人間関係を育てることを目的とした新たな方向に向かい始めている。

父親たちの会は新聞、雑誌でもしばしば取り上げられているように、この「おやじの会」も、決して目新しいものではない。子どもの行事やそのための手伝いに集まった父親たちが行事終了後、「ちょっと一杯」をきっかけに話が弾み、一種の異業種交流会あるいは情報交換の場として機能する。そして子どもの卒園、卒業で自然と集まらなくなるというパターンが多い。それに対して「すぎのこおやじの会」が10年以上続いているのはなぜだろうか。もちろん、ただ長く続けばいいということではない。しかし、この会の活動を見ると時間の経過と共に、父親自身が楽しむことを基本としつつも、活動の中で地域に目が向いてきたことが重要である。地域に目が向くことから、他の団体や行政との関係が視野に入り、次のステップへとつながっている。“男性を地域へ”というスローガンも、行政が音頭をとったからといって、すぐに実行されるというほど話は簡単ではない。すぎのこおやじの会は、地域に根ざしたボランティアなグループの活性化が、男性の地域参加を実現させるということ

を如実に示したケースといえよう。

3. 新たな関係づくり

以上の5つの事例すべてに共通するのは、それぞれの活動を通して、活動に参加している人間、そして組織の関係性が変化している点であることに気づく。これまで連携というと、行政、学校、PTA、ボランティアグループ、様々な団体といった既存の組織の枠組みを前提に、連携の在り方が議論されることが多かった。しかし、今回、注目した活動事例を見ると、さまざまな組織・機関がクロスオーバーしている点に特徴がある。「田んぼスケートリンク」では、スケートの腕前という子どもの成長が契機になり、父母や地域住民の関わり方が変容している。「子ども鬼太鼓」では、子どもを巻き込んだ「村おこし」が地域をあげて展開されている。千葉県打瀬小学校では、学校という制度的関係から、開かれた関係づくりをもとに、新たな生活の拠点づくりとして学校が位置づけられている。「すぎのこおやじの会」では、子どもとの関わりから関心が地域に向き、新たな関係性が模索されている。さらには、「せたがやチャイルドライン」は、様々なボランティア団体のヨコの関係が新たな活動を生み出している。

いずれの活動も、従来の関係性をこえたところに特徴が見られ、制度的な関係のもとで展開されているものではない。しかも、どの活動も現在さらに活動が進行しており、今後の動きから目が離せない。これらの活動を通してみると、地域の教育力は、地域に建物や施設というハード面が備わっているとか、あるいはこういう人がいる、グループがある、団体があるといったことだけではないことがわかる。実際に関わる人がどのようにして主体性を持って活動するようになったのが重要になる。

また、地域の中での連携を考える場合に、行政や学校は大きな意味を持っていることも明らかになった。活動のきっかけは様々である。まず誰かが声を出すことが必要である。もちろん、行政や学校がきっかけを作ることもあるだろう。しかし問題は、その後の活動の展開過程である。常に、行政や学校が前に立って引っ張っていくような活動であれば、参加者の主体性は育たないし、行政や学校の手足として使われているという意識はなくなる。しかも、参加者は常にお客様、あるいはお手伝いとして参加しているだけになる。参加者の主体性をいかにして引き出していくかが課題となる。そして、その主体性を引き出す契機こそが実は重要なのである。

活動の契機をみると、子どもたちに何かさせたい、保育園の子どもたちのために遊具を作りたい、子どものいじめの解決のためになど子どもを主眼としたものであつ

た。しかし、活動の中で〇〇のためだけではなく、実は大人にとっても、自己のアイデンティティの形成と密接に関連しているのである。最初は何かが頼まれる、仕事の分担、義務として参加していても、そのなかで楽しさをおぼえ、関わり方が変わってくる。子ども同士、子どもと大人、住民と行政といった既存の枠組みの中で、固定的な関係に基づいた活動であれば、主体性は生まれない。既成の枠組みを変えた新たな関係性が今回の活動例から見えてくるのである。

また、地域の教育力や家庭、学校、地域の連携を論ずるとき、子どもの問題行動への対処や問題解決といった子どもだけを中心にした議論が多い。しかし、今回の事例から、居心地のいい思い、楽しさ、安定感を得るのはなにも子どもだけでなく、子どものために活動を仕掛ける大人にとっても大きな意味を持つということは押さえておきたい。地域に子どもの居場所を創造することは、同時に大人の居場所を保障することでもある。

4 今後の課題

地域の教育力とは、「関係性」という視点から見ることにより、新たな視点が提供できる。実際の活動に個人がどのように関わり、どのような関係性がそこにつくられ、そして次のステップへと移行していくには、どのような新たな関係性が形成されたかを把握する必要がある。そのダイナミズムとプロセスをみていくことが重要なのではないだろうか。

地域の教育力を解明していくためには、どのように活動し、どんな成果が上がったかという結果を記述するだけでは足りない。子どもも大人も活動に参加してどのようなきっかけでどのように変わっていったのか、そのダイナミズムとプロセスを解明する新たな方法によるアプローチが必要である。

5 地域の青年団の取り組み

地域の教育力を考える場合、若者の活動に注目することには大きく二つの意味がある。第一に、現在の20代の若者は、彼ら自身がそれまでにいじめたり、いじめられたりというような体験を通じて少なからず教育の「傷」を受けている存在であるという点、したがって彼ら自身のそのことから生じるコンプレックスの克服が必要な状況にあるという点である。第二にそうした若者が子どもたちにとっては特別な存在になり得るという点である。少子化が指摘されて久しいが、兄弟姉妹の少ない子どもたちにとって、ちょっと上の「お姉ちゃん・お兄ちゃん」として親や先生といった「大人」とはひと味違った関係が期待できる。したがって、地域青年の任意集団として

自発的に活動を展開している青年団での活動を取り上げるのは、子どもたちにとってと同時に若者自身にとっての地域の教育力の再生に期待するからである。学校に通う子どもたちが、先生でもなく親でもない、気の置けない若者に感じる親しみが彼らの心を解きほぐし、同時に若者自身を解放する、そのような構図が調査した実践からかいま見ることが出来た。

とは言っても若者と子どもたちとが簡単に結びつくわけではない。5年離れると会話が成り立たなくなると言われるように、20才ばかりの若者が、「今の中学生は何を考えているかわからない。話が通じない。」とこぼす場面によく出会う。しかし、そこに共通の何かがあり、それに対しては若者の方が少し「先輩」であるとき、両者は実にうまく解け合うことが出来る。典型的な「何か」として、以下では「郷土芸能等の地域文化」「食と夜」「体を動かす共同作業」「いじめ・いじめられ体験」を軸にしながらか具体的な事例に則して考察を行いたい。

(1) 地域文化の共有

① 伝統文化を通じて

地域の伝統的な芸能や文化を伝承しようとする活動は広く全国で行われているのであるが、地域青年団が中心となってそれをさらに子どもたちへとつないでいこうとする活動はそれほど多くはない。」-6で取り上げられる沖縄県の「エイサー」はその典型である。また大阪府岸和田市の「だんじり」等のお祭りもそうした事例に数えられるのであるが、そこには長い伝統によってつくられてきた様式が確固として存在している。

それに対して、小さな村の場合は、それをやろうとする若者の意欲にかかっていることが多い。例えば、愛媛県柳谷村では「八釜龍神太鼓」と「しゃくなげ太鼓」の2曲を週に一回2時間ほど公民館に集まって青年団が中心となり子どもたちに教えており、村だけでなく県の事業でも披露するほどの力をもっている。たった13人の青年団員が手探りながら継続しているのだが、子どもたちは喜んで参加している。しかし地域住民の反応はそれほどよいものではなく、発表会の時少し見に来ると言った程度であり、自分の子どもがやっていないとほとんど無関心というのが現状のようだ。逆に「自分の子ども」が参加している親は非常に熱心に協力してくれると言う。そのような問題はあつたものの、太鼓を通じて若者と子どもたちは一体感を味わい、そのことに喜びを見いだしているのである。

② 新たな地域文化の創造によって

またそれまでにはなかつたような活動を生み出すことで、地域の見直しと新たな文化の創造を目指そうとする

試みもなされた。岩手県の青年団が中心的な担い手となって進めてきている「青少年ふるさと発見銀河鉄道」はそうした事業として定着を見せている。

岩手県青年団体協議会の会長を本部長として、訪問地を含めた県の青年団員の力を結集して、その他各機関・団体の参加を得ながら事業は運営される。県内各地からの200名近い参加者（小学高学年から高校生）を班に分けそれが行動の単位となる。一班は8人前後の年齢の違う子どもたちと青年団員によって構成される。3泊4日間、列車により県内各地を移動しながら、訪問地で青年団を中心とした受け入れ団体の用意したプログラムに参加する。その内容はふるさとを知る研修やクイズ・ゲームなどと、仲良くなるための交流会・キャンプファイヤー、さらに宮沢賢治に関する様々な学習、そして共同作業による創作活動等からなる。

宮沢賢治という巨星をいざ岩手の地を鉄道で旅するというのは、岩手の人であれば誰もが「我が文化」と胸を張る事業であろう。県民としてのアイデンティティを感じることに出来るテーマである。その地域固有の文化が糸口でありながら、そこには世界に向かって開かれる窓があり、参加した子どもたちはその窓から新たな発見をすることが出来る。そうした掘りを持つ事業として注目できる。さらに、一つの共通の体験をしながらの共同生活を通じて培われた人間関係が何よりの財産となっている。そのことは青年団から子どもたちに託すメッセージとして語られた次の言葉からも読みとることが出来る。「この青少年ふるさと発見銀河鉄道が出発するとき、私たち青年がみなさんに伝えたい2つのメッセージがあるとしました。1つは、県内各地の頑張っている青年の姿を見てほしいということ、もう1つは仲間との友情や出会いの大切さを学んでほしいということでした」(青年団体協議会会長、松浦さん、報告書、p.2) この目的は十分に果たされていることを同事業の報告書に寄せられた子どもたちの感想文は雄弁に物語っていた。どの感想文にも、楽しかったあれこれの思い出と共に、仲間との出会い、関わりが「友達」という言葉をキーワードとして語られているのである。子どもたちが1番求めているものがそれであるといえよう。

青年団の若者にしてみれば、責任を持って子どもたちの世話をするという体験、その中で喧嘩の仲裁や人間関係の調整、悩みの相談役などを引き受けることによって、子どもたちに信頼され当てにされる自分を確かめ、自分に対する「自信」のようなものを回復することが出来るのである。そうした自信が若者に自分たちでも思いもしなかつたほどの力を与えてくれる。例えば、この事業で重要な役割を演じた若者が結婚するに当たって地域の古

いしきたりに乗った結婚式とは別に二人の出身地を結んで「ウエディング・トレイン」を走らせるという前代未聞のイベントを若者たちが企画し実現させたことは、岩手の人々に大きな感動を与えたものであり、この事業の予想外の副産物であったといえよう。古くから人々に親しまれてきたふるさとの誇りを引き継ぎつつ、そこに新しい文化を育んで行くという発想が、若者とそれを直に見る子どもたちに希望を与えてくれる。

(2) 「夜」と「食」を媒介とした関わり

「夜」というのは子どもたちを特別に興奮させる力を持っている。しかも一緒に食べるという体験が人の距離を縮める力があることは広く体験されている。各地で見られる「キャンプ」が持つ力もそれによるところが大きい。

香川県高瀬町の「わんぱく寺子屋」はその持ち味を生かし切っている。20名の青年団員が主催者となり婦人会や子供会の協力を得ながら行っている事業であり、8月に2泊3日の日程で行う。小学の4・5年生を対象として35人ほどが参加しているのだが、実際には参加希望はこれ以上であるにもかかわらず受け入れる側の人数の問題で抽選にしているという。事業内容としては、天文観測、カレー作り、ゲートボール(高齢者の協力、参加を得る)、キャンプファイヤー、各種ゲーム、ペットボトルロケットなど盛りだくさんである。平成8年度で5回目を迎えたために、かつての参加者であった中学生2人がボランティアとして協力してくれた。こうした関わりが今後の大きな課題であると捉えられている。2泊3日と言う短期間であっても、寝食を共にすることで、子どもと若者との距離が縮み「友達」になれるところがこの事業の魅力であると青年団員は述べている。またこの事業の強みは地域の各種団体や各年代の人たちを巻き込むように構成されている点にある。その応援を得ることによって青年団員と一緒に遊ぶことに力を入れることが出来、それが子どもたちにとっては個々のプログラム以上に大切な役割を果たしていると言えよう。

「夜はわくわくする」という子どもたちの感性がある限り、そこをうまく取り込んだ事業は子どもを惹きつける。島根県出雲市神門青年団の主催した「かんど知ってナイト探検ウォーク」は、そうした子どもの心理をうまく捉えた事業であり、子どもたちだけでなく親をも巻き込み、100名以上の参加が得られた。夜の町を14.4キロ歩くのだが、ポイント毎にゲームやクイズが用意され楽しみながらゴールを目指す。毎年参加者が増えるところを見ると、強がったり、怯えたり、笑ったりしながらも歩き通すという体験を子どもたちが喜んで受け入れ、楽

しみにしていることが予想される。主催者として事業を組む青年団の若者たちは、この時ばかりは子どもたちに「尊敬される」気分を味わい、また事故なく事業を終らせるための裏方としての動きを通じて責任もって1つの事柄を成し遂げる喜びを仲間と共有することが出来るのである。親たちからすれば少し頼りないような若者たちが、こうした事業をやり遂げる姿がまた大人の若者を見る目を変える。

(3) 体を使いながら共同で「何か」を作りあげる。

スポーツや音楽のような表現方法を使いながら、1人では出来ないことを成し遂げるというような事業もそうとは意味づけをしているわけではないが、地域の教育的な力として無視できないものである。言葉による会話がなかなか成立しない場合でも、スポーツをしたり、一緒に作業することによって得られる共通体験は、同じ地域に暮らしているだけにその後の人間関係の深まりをもたらすきっかけとして有効である。

前掲の柳谷村では2つのスポーツを子どもたちと行っている。1つは誰でもが参加出来ると言うことでドッジボール大会。これは年1回の行事に過ぎないが、6才から60才までの70人の村民の参加があり、子どもたちからの評判もよかった。もう1つのスポーツは、村の青年団が柔道の部門で全国青年大会に参加したことをきっかけとして、青年たちが村へのお返しをしたいと言うことで始めた「柔道教室」である。現在は女子6人男子12人の18人が参加している。週1回の練習であるが県や郡の大会にも積極的に参加している。子どもたちが成長して行く姿がよくわかり、また礼儀などを伝えて行く場としての意味があり、柔道を愛好する青年団員たちやOBでつくる柔道会が近隣5か町村を巻き込んだ郡大会を主催したりと、大人たちとも連携しながら活動を続けている。

子どもと共に体を使って活動をする事例として次に愛媛県河辺村の「ジャンボカルタ」を取り上げたい。少子化の波に洗われている同村で、少しでも子どもたちに地域を見直してほしいという意図を持ちながら開催される行事であり、地域資源を題材としたカルタ(50センチ×80センチ)を青年団員が手作りし、それを学校の校庭や体育館に並べて子どもたちが走り回って探し出すという方法を探っている。子どもたちは体を動かし競争することで興奮し、若者たちは裏方に徹することで満足感を得る。しかも地域資源を使ったカルタ作成によって若者自身の地域再発見が多々ある。

(4) 「いじめ・いじめられ体験」と「コンプレックス」から自由になる

①「いじめ・いじめられ体験」の確認

地域青年団のなかで活動しているメンバーに質問すると、かなり多くが「いじめ・いじめられ体験」を持っていることがわかる。例えば、大分県青年団が主催した「自由学校」(2泊3日の日程で年に2回開催する。そのプログラム構成から運営まで参加者による協議をもとに自由に組み替えて行くことから自由学校と命名されているが、様々な抑圧からの「自由」という積極的な意味を、創設メンバーは込めている。筆者も継続的に関わっている。)では、子どものいじめについての講義(県の児童相談所の薬師寺さん)を行ったところ、自分の体験の問題として引き取る若者が多く、そのことが現在の自分の生きにくさを引き起こしていることへの気付きがあった。参加者の半数以上が「いじめられ体験」の持ち主であった。そのコンプレックスから自由になる場として、地域の居場所のような青年団での「仲間」があったことを多くの若者が語っていた。そしてまた、その体験を子どもたちに接するときの「共感」として生かすことが出来ることを大切にしたいという言葉も聞かれた。

②「いじめ問題」とバンド

「いじめられ体験」の共感から、それを前面に押し出して子どもたちへのエールを送ろうとする企画が見られる。子どもたちに人気のあるバンド演奏を利用し高校生を対象として徳島県羽ノ浦町で開催された「いじめをぶっ飛ばせ!バンド甲子園」である。高校生バンド10組の出演と、県内でいじめ問題について活動している先生たちのグループによる演劇を通じて、いじめについて参加者と共に考えようとした企画であった。予定より参加者が少なかったものの、出演した高校生が何よりも喜んでくれた点が収穫であったとする。

バンド演奏というのは今を生きる子どもたちにとって目新しいことではない。言葉でのコミュニケーションが十分に成立しない場合でも、バンドを介在させることによって心を開くという場面も多く見られる。それだけに情緒的な一体感の強さ、あるいはそれが強すぎるとカリスマ性のある演奏者に対する精神的な一体化が起こり、やや危険なマインド・コントロールが生じる場合もあるということは十分に留意しなければならないが、しかしバンドを通じて表現しようとしている子どもたちの内面の声を聞くことが、いじめ問題への取り組みであるという発想は大切にしたい。

「いじめられ体験」が乏しい大人や、どちらかと言えば優等生として子ども時代を過ごしてきた教師や教育関係者と違って、いわゆる「落ちこぼれ」を体験したり、成績のために進学を断念したり、成績を理由にさげすまれるような体験をしたりという、ごく普通の現代の若者

が特別な使命感を持たずに、日常的な感覚で子どもたちに接する、そのことの持つ教育的な力に大いに期待したいものである。

以上述べてきたような活動は、どこでも安定して継続されている訳ではない。地域青年集団は現在その組織基盤の弱体化によって存立の危機を迎えている。青年期の一過性の参加であるということから、メンバーの勧誘に失敗すれば組織は消滅してしまう運命にある。また、地域での集団活動を嫌うという最近の若者の傾向によって益々稀少化している。いったん活動に参加した若者からは、自分を認めてくれる「居場所」に出会えたという声の実に多く聞かれるのであるが、そのきっかけがなかなかつかめないのが実情である。かつては、社会教育の職員が青年教育こそ地域の未来を担うという使命感から地域の若者たちの中に飛び込んで活動を支援したのであるが、最近ではそうした職員も多くない。職員自身が青年の地域活動の必要性を感じないという声もある。地域などと言わずに、地球を視野に収めて大胆に活動する若者の方が、地域に根を張りながら地味な活動を続けている若者よりも、マスコミなどによっても高く評価されている。しかし、言うまでもなく文化の基盤は地域の日常生活にある。若者が生きていく喜びや楽しさを感じない地域は教育力以前の問題としてそのものが解体する危機をはらむ。

あまり取り上げられることのない小さな村の青年団が今でも細々ながら活動を続けていることを大切にしたい。ある青年は述べる。「その根本にある思いは子どもたちにいろんな経験をしてもらい、思い出を作ってもらうことである。昔あのお兄ちゃんやお姉ちゃんが、こんなことをしてくれたなあ、楽しかったなあ、おもしろかったなあと言う思いを持ってもらい、そして持ち続けてもらっていれば、10年後、20年後には、その子どもたちが大きくなって同じことをやってくれるだろうと思っている、現実私たちもそうやって近所のお兄さんやお姉さんたちにやってもらった記憶がある」(柳谷村の松林さん)。このようなことを真剣に考え実践している若者が、都市化の進行によって過疎に悩む村を実質的に支えているのである。

(千葉大学非常勤講師)

(国立婦人教育会館事業課研究員)

引用文献 国立婦人教育会館 1998『平成8年度～9年度都市化社会の進行と家庭・地域の教育機能に関する調査研究報告書』

(附記:なお、矢口担当部分は報告書を再掲したものである。)